

全国学力・学習状況調査の結果を受けて

4月17日(木)に、全国の6年生を対象に実施された「全国学力・学習状況調査」について、結果がまとめました。調査結果から見えてきた本校の子どもたちの学力状況をお伝えします。

総合的な結果から

国語、算数、理科のいずれも、平均正答率が全国平均よりも上回っていました。しかし、記述式の問題に對しては無回答が多く、「書くこと」に課題があることも改めてわかりました。

国語科の結果から

「ある発言をした話し手の意図を選択する問題」や「自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する問題」の正答率は、全国平均を大きく上回っていました。しかし、「ある資料を読んで自分が納得したことを、別の資料の内容を理由に挙げてまとめて書く問題」は、正答率が低い結果となりました。どの教科でも、目的に応じて情報を効果的に『集める』『整理する』『表現する』といった情報活用能力を育成できるような学習活動を、意識的に取り入れていくことが大切です。

算数科の結果から

「複数の棒グラフをもとに割合を求める問題」や「提示された資料から必要な情報を選び、正しい立式と答えを求める問題」では、全国平均と比べても高い正答率を得ています。しかし、「ある分数の加法について通分の考え方を基に、答えの求め方を簡潔に記述する問題」の正答率は全国平均は上回っていましたが、34%と低い結果でした。算数科の学習は、正答を求めるだけではなく、式、図形、数量などの関係や意味を考察して事実を見出し、それを確認したり、説明したりすることが大切であり、授業場面でもそのような学習活動を積極的に取り入れていく必要があります。

理科の結果から

「土と水の量を正しく設定した実験の方法を考える問題」や「電磁石を強くできる回路を選ぶ問題」では、全国平均を大きく上回っていました。しかし、「身の回りの金属の電気や磁石にかかる正しい性質を選ぶ問題」の正答率は、本校だけではなく、全国的にも著しく低い結果でした。授業でも、実験や観察などを通して体験的に学び、それらを正しく記録および表現することで、知識の定着を図ることを重要視していますが、過年度に学習したことは忘れてしまうことが多いです。そのため、意図して定期的に復習に取り組むことも大切です。

今回の調査をふり返って

国語では、話し合いの効果的な記録の仕方を考えたり、算数では、使いかけのハンドソープがあと何プッシュでなくなるのかを判断したり、理科では、海面水位が上昇した理由を予想したりと、全教科を通して、実生活に役立ちやすい問題が多く見られました。

また、この調査テストの問題文は、長文が多く、それを正しく読み、問われていることを的確に理解する能力も必要です。実際、児童の質問項目から「毎日10分以上読書をする児童」は、そうでない児童と比べて、回答率が高いことがわかつており、テストの正答率を上げることだけではなく、普段の生活を豊かにするためにも、さまざまな場面で発揮できる読解力を、読書を通して身に付けることも理想です。

今後とも、「学習内容が実生活とどうつながっているのか」「身に付けた力がどんな場面で使えるのか」などを結び付けられるような授業や、文章の中から必要な情報を取捨選択したり、整理したり、再構築したりして、要旨を把握するような学習活動を、教職員全体で意識していきたいと思います。